星野朝陽先生の逝去を悼みて

玉置照信

鶯や櫻のこして聲は消え

鶯や高天の原の聲となり

こはしたり今一聲をきゝのがし

石楠の花淋しげに咲にけり

故星野學士の思ひ出

東京帝大名譽教授
文學博士　三上參次

唯今は中山、藤懸二博士から、學術上の星野學士の功績を御話がありましたが、私は昔の帝大國史科の卒業生として私の講義をも聽かれた星野日子四郎君が念頭に浮んで來る。君は明治三十二年の卒業生で其の年の卒業生の中では、異彩を放つてをつた一人である。君は餘り材料の蒐集に熱心で蟻の如く集めてをつた爲めに、學年末に提出論文が間に合はず、先生から何度催促されても提出しない。尙孜々として圖書館に通ひ、矻々史料蒐集に餘念が無かつた。そこで先生も持て餘し、一策を案じて、君が圖書館からの歸途を不意打し、風呂敷包を其儘取り上げて、中から君が集めた材料を出して調査し、論文に採點し、辛らうじて學年終了に間に合はせたと云ふ面白い話もあつた。此の先生は田中義成教授で、師弟相互の意志の疏通、情合の濃かなものがこゝに見られる。眞に麗はしい話だと思ふ。君は卒業後同縣の人越後の五十嵐家の囑に應じて、越佐史の編纂に從事されたが、中途にして主人の死に遭ひ、その業は成らずして、君の拮据收輯された史料は、目下五十嵐家の庫中に埋藏されてをるさうだ。惜しい事だ。若しこの寶庫を開いたならば君の匿れた業績が世に現れ、大に史學界を益するであらうと思ふ。財團法人明治聖德記念學會の研究所入りをされてからは、時々その業績を同會の紀要又は單行本で發表された。星野君が飾らず作らざる卒直朴訥そのものと云ふ樣な性格の持主であられた爲め、今席その人を追悼する爲めに、私も昔の有りの儘の記憶を御話して、故人の面影を偲ぶ次第である（文責記者）